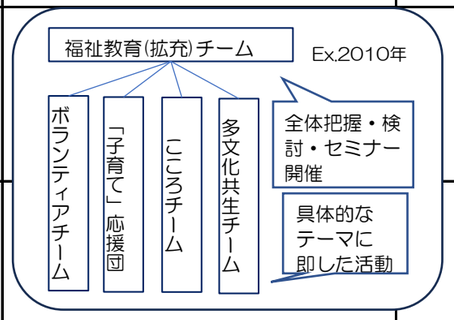
※こちらは、「福祉教育チーム」の20年間のリフレクションのために作成し、「第20回 福祉教育セミナー」（2023年12月）に活用した資料となります。
（2024年11月 追記）

逗子市の「福祉教育チーム」 20年間のあゆみ （2002年～2023年）

年度	福祉教育チーム	福祉教育セミナー/基調講演テーマ ・パネルトーク・事例発表のテーマ（内容）	プロジェクト（タスクチーム）	備考 （◎全国的な取組）
1980	逗子社協では、福祉教育チーム創設（2002年）の25年くらい前から、市内の小学校5年生を対象に車椅子体験を中心にした福祉学習を、また中学・高校生を対象に市内で福祉施設体験を行う「サマースクール」を実施していた。これらの福祉教育推進事業は、児童・生徒が福祉にふれあうきっかけ作りの場として、一定程度の成果はあげていたが、学校による取り組みの差や、断片的でないより包括的な福祉教育プログラムの研究強化の必要性が逗子社協の課題となっていた。			◎WHO（世界保健機関）が「ICIDH（国際障害分類）」を作成 ・疾病や病気から「機能障害」が発生し、それが「能力低下（できないこと）」を引き起こし、「社会的不利」をもたらすという障がいの階層構造を提案。 ・「ICIDH」が作成され各地で疑似体験プログラムが取り組まれる。（1980～90年代）
1998				◎学習指導要領が改定。「生きる力」の育成が示された
2001				◎WHOが「ICIDH」の改訂版として「ICF（国際生活機能分類）」を作成 「何ができないか」ではなく「何ができるのか」というストレングス（力・強さ）を重視するとともに、社会的障壁である「環境因子」に問題があるという考え方。「できない」体験をする疑似体験ではなく「当事者の語りを大切にする」または「生活を知る」というプログラムが少しずつ広がっていった。
2002	**福祉教育チーム創設**			◎小中学校で「総合的な学習の時間」導入・実施
2002	**「福祉教育検討プロジェクトチーム」** 2002年6月～2004年9月 メンバー：学識経験者、ボランティア、福祉施設関係者、教育委員会福祉担当者、行政福祉部担当者、社協職員 地域福祉ボランティア、福祉施設関係者、教育関係者、行政等をメンバーとした、様々な立場からの意見交換と協働実践を生み出すプラットフォームとして発足した。 逗子の福祉教育の理念・目的・目標・プログラム・推進システムの検討を行った。チームでは当初計画よりも、数多くの議論を重ね、さらに、理念・研究的視点と実践的視点を交錯させ、より多くの人と意見交換を行うプロセスとして「福祉教育セミナー」の開催に至った。		「福祉教育セミナー」はチームメンバーが、企画や登壇者の調整、当日の運営を担当する。 第1回、第2回は、2日間のプログラムとして、1日目に事例発表や基調講演を、2日目にフィールドワーク（福祉施設体験）と振り返りを実施。体験から逗子の資源を活かした福祉教育プログラムの検討につなげた。 第3回以降は、1日のプログラムとして、①アイスブレイク、②パネルトーク（学校を含む地域の実践報告）、③原田正樹先生の基調講演、④グループワークを実施してきた。	→「福祉教育チームが」生まれた経緯 課題：包括的な福祉教育プログラムの研究強化の必要性 目的：①逗子の福祉教育の理念を明らかにする ②逗子の資源を活用した発達段階に応じた段階的福祉教育プログラムの作成 ③逗子の福祉教育推進システムの構想
2003		**第1回 ワークショップで創る** ［8月5日，6日］参加者32名 ／ 福祉教育とは～その目的と課題～ ・福祉施設のフィールド体験		◎高校で「総合的な学習の時間」導入・実施
2004		**第2回 学校と地域でつくる福祉教育** ［8月5日，6日］参加者31名 ／ 福祉教育とは～その目的と課題～ ・教員からの事例発表（小・中・高校より） ・福祉施設のフィールド体験 ・地域との連携を主としたプログラム（他地域の中学・高校からの報告）		発行：**「学校と地域でつくる福祉教育」**（2004年8月） 福祉教育検討プロジェクトを立ち上げた経緯・福祉教育の理念・検討実践・各学校実践の報告書。「福祉とは」「福祉教育の目的」「発達段階に応じた目標」の整理はその後の実践検討における基礎として、位置づけされている。
2005	**「福祉教育実践検討チーム」** 2005年5月～2007年3月 メンバー：学識経験者、ボランティア、福祉施設関係者、教育委員会福祉担当者、社協職員 2期目のチームとして、1期目に検討されたものをいかに実践に移すか検討を重ねた。 「福祉教育セミナー」では第3回までは学校教育を想定した福祉教育が中心であったが、第4回からは、地域福祉の課題を見つめつつ、学校を含む地域の場で、どの様な福祉教育を、どのような仕組みの中で作り出せるかという協議へ移行した。	**第3回 地域でつくる福祉教育** ［8月］参加者82名 ／ 地域福祉と福祉教育		
2006		**第4回 地域でつながる福祉教育** ［8月29日］参加者60名 ／ 地域でつながる福祉教育 ・地域サロンと小学校の交流事例 （サロンスタッフと小学校から報告） ・社協のサマースクール、福祉学習		発行：**「地域でつなげる福祉教育」**（2007年3月） 学校を含む地域で福祉教育を進める仕組みの検討、福祉教育段階的プログラム・教材の作成における報告書。「発達段階に応じた目標」を受け、実践で活用するために、5つのプログラム・教材を提案。また「地域ぐるみの展開」を図っていくための実践検討がなされた。
2008	**「福祉教育推進チーム」** 2008年3月～2010年3月 メンバー：学識経験者、ボランティア、地域活動者、教育委員会福祉担当者、社協職員 3期目のチームでは、学校教育及び、学校を含む地域における実践について検討してきたものを推し進めていくことを目標に掲げた。 「福祉教育セミナー」では、第5回に、5つのテーマを設定し、テーマに応じた実践プログラムを参加者と共に協議した。そのことをきっかけとして、チーム内にテーマに応じたタスクチーム（プロジェクト）が作られ、有志のメンバーとの協働実践へと発展した。第6回では、タスクチームの1年間の試み（実践）を共有し、さらに参加者を交えて意見交換を行う場をつくった。また新しいテーマを検討するグループワークでは、「こころプロジェクト」が発足するきっかけとなる協議が行われた。	**第5回 地域がつくる福祉教育プログラム** ［8月22日］参加者35名 ／いのちとくらしを大切にする福祉教育 ・福祉教育として何が大切か （小学校2校、ボランティア、育連協）	セミナーでのグループワーク「今後の在り方検討」において、実践の**タスクチーム（プロジェクト）**（※下記参照）がつくられた。検討・実践を次年度セミナーで報告した。	◎文部科学省「脱ゆとり教育」学習指導要領実施
2009		**第6回 地域がつくる福祉教育プログラム** ［8月21日］参加者62名 ／ 福祉教育の基本的視点とプログラムの協同実践 ・福祉教育として大切にしたいこと（中学校と防災ボランティア、育成会、タスクチーム）	**「災害」**（2009年） ・久木中学校実践・サバイバル親子体験塾・避難所運営訓練参加	（「災害」補足）→子どもから大人までが「防災」を意識して地域のつながりに目を向けること、また災害時に自分のできる最大のことを見出す力を養うことをねらいとして、世代間の溝を超えるような様々な実践を、学校を含む地域の場で行った。 その後、久木中学校での福祉防災体験学習として継続的な取組へ発展した。

※こちらは、「福祉教育チーム」の20年間のリフレクションのために作成し、「第20回 福祉教育セミナー」（2023年12月）に活用した資料となります。
（2024年11月 追記）

逗子市の「福祉教育チーム」 20年間のあゆみ （2002年～2023年）

年度	福祉教育チーム	福祉教育セミナー/基調講演テーマ ・パネルトーク・事例発表のテーマ（内容）	プロジェクト（タスクチーム）	備考 （◎全国的な取組）
2010	**「福祉教育拡充チーム」** 2010年4月～2012年3月 メンバー：学識経験者、ボランティア、地域活動者、福祉施設関係者、教育委員会福祉担当者、社協職員 4期目のチームでは、福祉教育の協働実践を、さらに、様々な人たちを巻き込んで、拡げていくことを目標に掲げた。 「福祉教育セミナー」では、第7回にタスクチームが取り組んだ実践の共有。第8回では、10年間の取組みを様々な立場（学校・ボランティア・福祉施設・社協）から振り返り、今後の協働実践と福祉教育推進のプラットフォームの拡充や、個人の体験・学びを「共生文化のまちづくり」にどのようにつなげていくのか、またリフレクションの視点を考える機会となった。	**第7回 地域がつくる福祉教育プログラム** [8月19日]参加者51名 ／ 福祉教育とボランティア ・この1年間の活動に学ぶ（タスクチーム、ボランティア活動と小学校、中学・高校の取組）	**「知的障害理解」** （2009年） ・地域キャラバン隊・避難所運営訓練参加	（「知的障害理解」補足）→学校での福祉学習の場だけではなく、地域住民に対して障がい理解の啓発の必要性や、災害時の支援について課題があり、「逗子市手をつなぐ育成会」の家族が避難所訓練に参加するプログラムにつながった。災害時を想定した時の平時のつながりや、地域生活における多様性の理解、支え合う地域づくりは継続的な取組みが必要である。
2011		**第8回 地域がつくる福祉教育プログラム** **～10年を振り返り、これからを考える～** [8月17日]参加者52名 ／ 福祉教育のこれからを考える ・この10年間の活動に学ぶ（小学校、ボランティア、施設、社協の立場から）	**「国際交流」** （2009年） **「多文化共生」** （2010～2011年） ・教材作り・逗子小学校実践・池子小学校実践	（「国際交流・多文化共生」補足）→国際交流・国際協力に興味を抱いた大学生が仲間を集めて「多文化共生」をテーマに地域調査とプログラムづくり、小学校での実践を行った。地域調査で外国からの転入生との出会いが、実践者（大学生）自身にも影響を与え、プログラムづくりに活用された。 メンバーの大学卒業により終了したプロジェクトだが、作成されたプログラムは残る。
2012	**「福祉教育協働実践チーム」** 2012年4月～2014年3月 メンバー：学識経験者、ボランティア、地域活動者、福祉施設関係者、教育委員会福祉担当者、社協職員 5期目のチームでは、地域を軸にした協働実践の在り方を模索。「福祉教育セミナー」では、地域にみる福祉教育と学校にみる福祉教育の連携の在り方を、各方面（地域活動・教育・自治会・若者等）から探求した。それぞれの取り組みでは相互の関係性からの学びと拡がりがあるが、さらに、企画からリフレクションまでの関わりや、どこでも福祉が学びあえる環境（プラットフォーム）づくりが、逗子の福祉教育に必要であると確認ができた。	**第9回 協働でつくる福祉教育プログラム** **～地域と学校の連携を考える～** [7月30日]参加者41名 ／ 地域と学校の連携による福祉教育 ・新たな連携へ向けて（地域活動者、教員、自治会、若者の立場から）	**「子育て応援団」** （2009～2013年） ・ごほうび講座開催・叱る講座開催・子どものほめ方叱り方懇親会開催	（「子育て応援団」補足）→子育て支援に関して、地域で多世代のつながりを作り出すの必要性を感じると共に、後継者に悩む自治会が多いことから、子育てを地域ぐるみで考える意識啓発を自治会と共に実践。定着は難しいが、地域の人とつながっているという感覚と、自らつながろうとする力を養うことが福祉教育の役割であることを確認。人の成長を着眼点とする取組みであった。
2013		**第10回 協働でつくる福祉教育プログラム** **～地域と学校の連携を考える～** [8月5日]参加者47名 ／ 地域と学校の連携を考える ～共生文化の創造へ向けて～ ・新たな連携に向けて（自治会、学校、若者、他地域の取組みから）	**「ボランティア」** （2010～2013年） **「若者参加」** （2012～2013年） ・「ボランティアハンドブック」作成、施設職員研修、ボランティアスクール	（「ボランティア/若者参加」補足）→様々な地域事例にみるボランティア活動における大切なことをまとめた冊子を作成。現在活動している人たちはもちろん、これから活動を始める人たちにも伝えたい内容をまとめた。 その後、ボランティア受け入れ側の施設職員研修や、学生向けボランティアスクール等で周知・説明に活用した。
2014	**「福祉教育チーム」** 2014年4月～2016年3月 メンバー：学識経験者、ボランティア、地域活動者、福祉施設関係者、教育委員会福祉担当者、社協職員 6期目のチームでは、福祉教育と地域福祉の連関を探ることを目標に設定。「福祉教育を原点から考える」ことを念頭に、チーム名称は「福祉教育チーム」として、これ以降、同名称を使用。 「福祉教育セミナー」では、第11回に福祉教育実践者から、第12回には地域活動者から、気づきや住民同士の学び合いについて報告・共有された。地域の支え合い活動やサロン活動が活発であり、関心者が多かったこの年の参加者数は、過去最高であり、逗子のまちの福祉力の高まりが感じられた。	**第11回 福祉教育を原点から考える** **～ふだんのくらしのしあわせとは～** [8月19日]参加者48名 ／ 福祉教育の原点とは ～共生文化の創造へ向けて～ ・地域事例から考える福祉教育の原点（高校、発達障がい、子育て、高齢者）	**「こころプロジェクト」** （2010～現在：学校実践プロジェクトとして稼働中） ・中学校実践「見た目では分かりづらい障がい、困りごとへの理解	（「こころ」補足）→発達障がいへの理解促進として、プログラム検討・中学校実践を開始。1校1学年から始まり、4年目には2校、5年目には3校に拡がった。また6年目からは2学年で実施され、さらに3校3学年での実施に向けて、学校側との調整・協議を重ねてきた。教員研修や教員アンケート（ヒアリング）も実施しながらプログラムの再考を重ね、現在も継続して実践中。
2015		**第12回 地域福祉活動と福祉教育** [8月19日]参加者89名 ／ 地域住民の福祉力を育む福祉教育 ・地域福祉活動からみる福祉教育の課題（自主防災、お互いさまサポーター、地域サロン、学校支援地域本部）	（プロジェクト活動の仕組み）	発行：**「みんなが「ともに生きる」福祉教育の12年」** （2015年8月） 理念の検討・整理、プログラム検討が主であった1期2期チーム以降、具体的に取り組むプロジェクトが開始。これまでの12年間、プロジェクトチーム等が学校を含む地域で行ってきた福祉教育実践をまとめ、多くの人との共有と、今後の方向性を探ることを目的として作成された。（12年間の実践の記念冊子）
2016	**「福祉教育チーム」** 2016年4月～2018年3月 メンバー：学識経験者、ボランティア、地域活動者、福祉施設関係者、教育委員会福祉担当者、社協職員 7期目の福祉教育チーム。まず、「福祉教育セミナー」第13回では、地域福祉を軸に、「福祉のまちづくり」をキーワードとしたが、原田先生からは「ふくしでまちづくり」という視点をいただく。そこで、翌年の第14回では、「ふくしでまちづくり」に向けた30年後の地域を描き、そのために今、必要な福祉教育を確認した。	**第13回 ふだんのくらしのしあわせをつかむ地域の活動～福祉のまちづくりに向けた福祉教育～** [12/27]参加者61名 ／ ‘ふくしでまちづくり’に向けた福祉教育 ・福祉のまちづくりへ繋がる私たちの活動（自治会、30’sプロジェクト、小学校）		
2017		**第14回 ‘ふくしでまちづくり’に向けた福祉教育** **～30年後の地域をえがく～** [8/18]参加者61名 ／ ‘ふくしでまちづくり’に向けた福祉教育 ～30年後の地域をえがく～ ・それぞれの立場から30年後をえがく（子育ち支援、学校実践、若者の活動、住民協）		◎地域共生社会の実現に向けて福祉教育の必要性が位置づけられた

※こちらは、「福祉教育チーム」の20年間のリフレクションのために作成し、「第20回 福祉教育セミナー」（2023年12月）に活用した資料となります。
（2024年11月 追記）

逗子市の「福祉教育チーム」 20年間のあゆみ （2002年～2023年）

年度	福祉教育チーム	福祉教育セミナー/基調講演テーマ ・パネルトーク・事例発表のテーマ（内容）	プロジェクト（タスクチーム）	備考 （◎全国的な取組）
2018	**「福祉教育チーム」** 2018年4月～2020年3月 メンバー：学識経験者、ボランティア、地域活動者、福祉施設関係者、教育委員会福祉担当者、社協職員 ８期目の福祉教育チームは、「地域共生」をテーマとした。「福祉教育セミナー」第15回では、中学3年生が視覚障がい者への声かけと気づきに関する作文を発表した。そして、それを「当たり前の風景」と表した言葉が印象に残る。第16回はふくしの「当事者性」に焦点を当て、「普通ってなんだろう」と問いかけた中学生の作文紹介からスタートした。地縁組織における子育て世代の取組や、福祉授業を経た教員自身の気づきが報告され、一人一人が主役である地域共生社会を考えた。	**第15回 地域共生の文化づくりに向けて ～まなび・つながり・しくみの視点から～** ［8月8日］参加者71姪 ／ 地域共生の文化づくりと福祉教育 ・まなび・つながり・しくみの視点から（学生と当事者、地域拠点、住民協と専門職）	**「子育て活動冊子作成」** （2018～2019年） ・「地域の子育て活動～逗子の地域活動団体の10事例～」冊子作成。	（「冊子作成」補足）→現状の活動に関わる人々（子育て世代）が地域福祉に関心を持ち、活動に繋がることを目的とした今後の提案冊子として作成。今後の福祉教育実践に繋がる人々（活動）からの、現状の活動と今後、地域福祉との連動が期待される取組や活動者の思いを紹介した。 ・子育て世代に向けて、地域の取り組みや人と関わる機会、活動に参加する機会をつくるための取り組みを継続中。
2019		**第16回 地域共生社会における当事者性を考える～ふくしの視点から～** ［8月9日］参加者53名 ／ 地域共生社会における当事者性を考える ～ふくしの視点から～ ・活動を通した当事者性を考える（人権作文、自治会活動、中学教員、フェアトレード）	（「福祉教育セミナー」の様子） 	
2020	**「福祉教育チーム」** 2020年4月～2024年3月 メンバー：学識経験者、ボランティア、地域活動者、福祉施設関係者、教育委員会福祉担当者、障がいの当事者、社協職員 ９期目の福祉教育チームは、コロナ禍で、様々な活動が休止。福祉教育実践も模索状態となった。「福祉教育セミナー」は8月開催を中止としたが、今だからこそ、孤立に向き合い、関係性を閉ざさない取組みを検討・共有するため、12月に開催された。	**第17回 コロナ禍から考える、孤立しない逗子の生活 ～これからの‘新しい生活’にむけて～** ［12月20日］参加者83名（会場16、オンライン67） ／ コロナ禍から考える福祉で地域づくり～地域の動きとこれから～ ・繋がりをつくる（自治会、子どもたちの活動、地域魅力（助け合い活動）		開催：**「拡大メンバー会合」**（2020年11月・2021年２月） 改めて「プロジェクト」を捉え直し、継続的また発展的な取組に繋がるよう、活動メンバー（実践者）への意識啓発の場を設定。（次期プロジェクトメンバーに向けて）福祉教育に携わるに当たり、①逗子の福祉教育活動への理解②福祉教育活動と地域福祉の繋がりへの理解③当事者意識の醸成を目的として開催。 →次年度４月から、3カ年計画として、3プロジェクトが始動。
2021	２年任期としてきた福祉教育チームだが、コロナ禍であった1年目の後、2021年度から「福祉教育セミナー」第20回を目指して3カ年計画を開始した。（任期は2023年度まで延長）近年、プロジェクトの稼働が「こころプロジェクト」（中学校実践）のみとなっていたことから、プロジェクトの在り方を見直した。そして、有志メンバーの地域住民（地域活動者）や福祉専門職・教育関係者等による全体会「拡大会合」を開催し、共通理念のもと、新たなプロジェクトを立ち上げた。（会合目的・プロジェクト内容は右記参照）	**第18回 誰一人取り残さないまち逗子を目指して** ［12月18日］参加者65名（会場55、オンライン10） ／ インクルージョンと共生の文化づくり ・つながり合うための課題を考える（3つのプロジェクト：絵本・アート、学校実践、地域活動チームから）	**「学校実践プロジェクト」** （こころ2010年～学校実践2021年～2023年）※継続中。次頁に活動内容を紹介 ・小中学校の連続性のあるプログラムづくり、協同実践（当事者・専門職・活動者）	（「学校実践」補足）→「こころプロジェクトチーム」を再編し、中学校だけでなく、小学校からの連続的なプログラムの構築を目指して「学校実践プロジェクト」が始動した。 ・小学校実践…地域の様々な方たちとの関わりからの学び。違いに触れて、同じを知り、関係性を拡げていく。みんな違って当たり前であり、得意なことをシェアリングすることの学び。 ・中学校実践…多様性や地域生活課題からの学び。「発達障がい」「LGBT」「認知症」等。
2022	3カ年計画の大テーマを「インクルージョンと共生の文化づくり」に設定。「福祉教育セミナー」も大テーマの基、プロジェクト活動を軸にして、１年目（第18回）に課題の共有、２年目（第19回）に課題に即した福祉教育の種蒔きとなる実践の報告、３年目（第20回）に今後の展望をテーマとして設定した。 第19回では、プログラムを各プロジェクトによるワークショップ形式として進めた。第20回では、基調講演において、原田先生と共に、逗子の20年間の福祉教育のあゆみを振り返り、今後、セカンドステージへと向かう展望を共有した。	**第19回 福祉の種まき実践を考える～インクルージョンと共生の文化づくり～** ［1月7日］参加者63名（会場49、オンライン14） ／ 福祉の種まき実践～インクルージョンと共生の文化づくりに向けて～ ・3つのプロジェクト（絵本・アート、学校実践、地域活動）によるワークショップ（種まき実践）	**「地域活動プロジェクト」** （2021年～2023年） ・地域のつながりやつながる必要性を考える。自治組織のない地域へのアプローチ。	（「地域活動」補足）→地域の中のつながりやその必要性を検討。つながるためのアプローチの実践。 ・「楽しい」をキーワードにつながる若い世代の取組みや地域の有償サービスを検証した。 ・自治組織のない地域へのアプローチとして、防災＆地域交流アンケート（対象地域の355世帯）、わたしの街の掲示板を考える集い、地域交流会、防災カフェを実施。
2023		**第20回「私たちのまち逗子」における福祉教育の展望**～インクルージョンと共生の文化づくりに向けて～ ［12月27日］参加者59名（会場46、オンライン13） ／ 福祉教育の展望 ～インクルージョンと共生の文化づくりに向けて～ ・「わたしたちのまち逗子」における福祉教育の実践と展望（3プロジェクトより）	**「絵本・アートプロジェクト」** （2021年～2023年）※継続中 ・絵本を通して、これまでの福祉のとらえ方を深め、拡げる。幅広い層への啓発。	（「絵本・アート」補足）→絵本を通して、これまでの福祉の捉え方を深め、福祉の関心層の拡がりに向けた実践。 ・福祉に関するテーマの軸である「インクルージョン」につながる6つのキーワードをもとに、「大人にも読んで欲しい絵本」の収集、絵本リスト作成、絵本展示、絵本を活用した場づくり、絵本コーナー設置、「逗子を旅する絵本」やワークショップを実施。
2024	新たなステージへ			

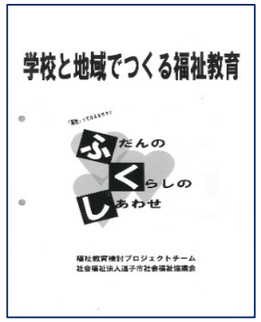
※こちらは、「福祉教育チーム」の20年間のリフレクションのために作成し、「第20回 福祉教育セミナー」（2023年12月）に活用した資料となります。
（2024年11月 追記）

逗子市の「福祉教育チーム」 20年間のあゆみ （2002年～2023年）

年度	福祉教育チーム	福祉教育セミナー/基調講演テーマ ・パネルトーク・事例発表のテーマ（内容）	プロジェクト（タスクチーム）	備考 （◎全国的な取組）

参考資料

これまに福祉教育チーム（プロジェクト）が作成した【報告書・記念誌・冊子】など



資料①
「学校と地域でつくる福祉教育」
（2004年8月 発行）

資料②
「地域でつなげる福祉教育」
（2007年３月 発行）

資料③
「ボランティアハンドブック」
（2012年３月 発行）

資料④
「みんなが『ともに生きる』
福祉教育の12年」
（2015年8月 発行）

資料⑤
「地域の子育て活動」
（2020年３月 発行）

資料⑥
「絵本リスト」（2021年12月 発行）

資料⑦
「絵本リスト-増補版-（2023年12月発行）

【『学校実践プロジェクト』における小学校・中学校の授業実践の内容（2021年作成）】

小学校

学校実践プロジェクト

交流や体験を通して、様々な人や状況を知ること、共に生きてくための力を身に付けること

【１】視覚障害者との交流

①ブラインドサッカー（選手）②荒木さん「みんなが笑顔」　③石井さん　日常生活

安心して暮らせるまちを考えます
「ふくし」について考えていきます

【２】講話

①「ふくしってなあに」
建物・心のバリアフリー

見えにくい困りごと、自分の周り、自分自身のことを考えます

②「こころの授業」
凸凹得意不得意‥

（生徒感想）
体験を通して、他の目が見えない人のことも想像した。困っている人に声をかけたい
また会えたら、一緒に楽しいことをしたい。また会えることを楽しみにしている
選手がかっこよかった。教えてもらえて、みんなで楽しかった

（生徒感想）
ふくしの意味を家族にも伝えた
いろんな人がいる、工夫があることを知った
みんなが幸せでいられるように考えたい

（生徒感想）
誰かが関わることで生活しやすくなる人がいる
困っている人の理由や、接し方が分かった
みんなそれぞれ。凸凹はいいところに繋がる

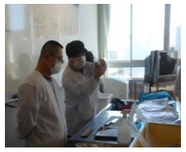
発展

【３】各学校（生徒）の状況や興味関心に応じて、
もっと知りたいことを深めたり、知り合いたい人と交流します

①沼リンピック
みんなでできる運動会

②大石さん　耳の聞こえない世界

③やまばとの会　録音ボランティア体験



④知的障がいの方との交流　クッキーづくり・キャンドルづくり

（生徒感想）
コミュニケーションの方法は、いろいろある。 いろいろな工夫があることを知った。 周りに困っている人がいたら手助けしていきたい。
それぞれ個性があることを知った。笑顔が印象的だった。 教えてくれてありがとうございました。 今後、まちで会ったら声をかけたい。

中学校

「生きづらさを抱えた人と地域で共にくらす」　見た目で分かりづらい困りごとへの理解、相違点と共に自分との接点を見出す

【中学１年生】　発達障がいの方への理解から

①全体講話：いじめ、心の健康、ヘルプマーク、凸凹

②各クラスの授業　：　DVD（文字の見え方・友達との関わり）、ワーク（音声理解の難しさ・氷山モデル・短所から長所を考えよう）

（生徒感想）
・私と違う人がいるのが当たり前で、たくさんの違う心を持った人と関わって、たくさんのことを想像して、人の心を考えられる人になりたい
・自分の短所を長所として認めてもらえることはすごく良いことだと思った 足りない部分を他の人と補合いながら生きていけば良いと思った
・「普通」はないと分かった。もし自分がみんなと考え方が違うと思ってしまったら、今回の学んだことを活かして、「自分らしさ」という言葉を大切にしたい　・人には色々な個性があり、それを否定するのではなく、それをプラスとして捉えるのが大事だと思った

【中学３年生】　認知症の方への理解から

①全体講話：マイノリティ、認知症の基礎理解

②全体講話：かながわオレンジ大使（柳田誠さん）の話、ウクレレ演奏

③各クラス授業：DVD、氷山モデル説明、認知症サポーター

（生徒感想）
・認知症は本人と家族だけが支え合っていくものと思っていたけど、地域で支えあっていくことも大切だと学ぶことができた
・これからは正しい知識を基にして、正しく接し、支え合える環境をつくろうと思う
・認知症の生活や本人の思いを学んで、大変だと思ったが、そこで大事なのは一人ではなく、たくさんの人に頼って生きていくこと。自分ができることは何かじっくり考えたい。
・１年生での発達障がい、３年生での認知症の授業で得たものは大きいと感じる

【中学２年生】　LGBTの方への理解から

・令和元年度、初の試みとして実施を計画したが、新型コロナウイルス感染症の影響により中止。　➜令和３年度、全体講話（福祉教育チーム 宮脇さん）のみ実施。
・これまでの全体講話中の「LGBT」に関して、生徒感想文からは関心の高さが伺え、また自身の悩みの記述もあったため、新たにテーマ設定を行った。
・当事者（NPO法人SHIP 代表 星野さん）からの講演と、宮脇さん（福祉教育チーム/宇都宮短期大学教授）からのワークショップを計画。